道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

園内を巡るスタンプラリーをしながら進みました！

三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～ http://www.fairytale.jp/ ～

今年の夏は、まさに沸騰という言葉がピッタリでした。長野県にも4日間連続で熱中症警戒アラートが出たので、「そうだ、山へ行こう」と北アルプスへ。定番の燕岳は渋滞と駐車場が心配だったので断念。次登るならここと思っていた爺ヶ岳の柏原新道は、種池山荘の柏原正泰氏が何年もかかって造り上げた登山道。ワクワクしますが、テレビで特集が流れた直後なので、やはり人が多そう。という訳で、スノーボードでよく通っていた白馬五竜スキー場のアルプス平に広がる高山植物園に行くことにしました。登山ではなくハイキングになったので、「じゃあ行こうかな」と、夫が同行してくれました。まるで夏休み～！春からの休日はすべて夫婦で草刈りと庭の手入れだったので、立秋と共に草の勢いが少し収まり、そんな時間が生まれたことに感謝です。

テレキャビンで一気に標高1500メートルまで上がったところに広がる「白馬五竜高山植物園」は、丹念に手入れされている素晴らしい天空のお花畑でした。気温は21℃でしたが、広がる雲と風のお陰で、涼しくて気持ちのいいこと！どうしても雪に覆われた冬季の姿がダブり、「あの雪面の下にこんな子たちがいたなんて」と何度も叫んでしまいます。不思議なことにスキー場の方が広く、そして斜面が緩く感じるのですが、二つの景色をダブらせながら、ゆっくりと散策。園内には300種類200万株の高山植物があるそうで、8月初めでも多くの花が楽しめました。高山エリアには、標高2500メートルに咲くコマクサ植物たちが群生。草原エリアには、ヤナギランやカライトソウ。山の花エリアには、マツムシソウ、シモツケソウ、ヤマルリトラノオ。アルプス平自然遊歩道には、ミヤマトウキ、ツリガネニンジン、高山植物ロックガーデンには、クルマユリ、エゾアジサイなどなど。どの子も可愛いく健気で愛おしい！

スキーシーズンだと簡単には歩いて行けない標高1676メートルの地蔵ケルンからのアルプス展望もよかったです。距離が短いのでサンダルやスカートの方もいましたが、ワイルドなのに整備されているので問題なし。小さな沼や湿原が楽しめるロックな遊歩道や巨大タゲカンバ、そしてお花畑の斜面をジグザグに走る木の遊歩道を下ると、高山アリアで斜面に這いつくばっている10人ほどの姿に気づきました。貴重な苗や土や石を保全するスタッフでした。膝と腰…大丈夫？という体勢でしたが、時々お喋りしながら楽しそうに作業に励んでおられました。本当にご苦労様です。歩いている園来者たちも、短い夏を謳歌する花たちを愛おしそうに愛でています。私も行ったり来たりしながら、大興奮。100キロを超えるトレランに出ていた頃は、試走の時に咲いている花や景色をすべて満喫しないと本番で気になって大変なことになっていたことを思い出します。アイガーのワタスゲは代表格。モンブランのワイルドベリーも可愛かったなあ。かつて白馬岩岳スキー場でヤギを放牧してチーズを作っていた夫も、凄く楽しそう。当たり前ですが、アルプスは四季折々楽しめますね。

さて、アルプス平駅にあるビジターセンターでは日本の植物学の父である牧野氏の「牧野富太郎展～博士に縁ある信州の植物～」が開催されており、覗いたらビックリの楽しさでした。そもそも四国（愛媛県）に先祖のルーツがある私ですが、なぜか今でも高知県とは縁が深く、20代のころから高知に行ったら、まずは「高知県立牧野植物園」へ、でした。けれど、こんなに信州と縁があったとはつゆ知らず。先ほど見た花たちの中にも彼が名付けたものがいっぱいありました（さすが1500種の名付け親！）。コマクサ、シナノナデシコ、シロバナベニイチゴ、カライトソウ、オオタチツボスミレ、私の大好きなウバユリも。いやはや驚きです。

噂に聞いていたヒマラヤエリアに定借させたという標高4000メートルに自生する幻のヒマラヤの青いケシは、1ヶ月前の7月上旬～中旬が旬ということで、残念ながら枯れた姿を愛でてきました。ようこそ日本へ。来年は会えるといいなあ。登山が低速ハイクになった休日でしたが、この緩さ加減はとても涼しくて大正解でした。この8月も暑さや台風など天候に不安はありますが、草刈りはほどほどにして「小さな旅」を続けたいなと思っています♪

富太郎さん命名のカライトソウ（バラ科ワレモコウ属）の群生。花言葉は「深い想い」。

マツムシソウ、コマクサ、中国のユリの仲間、プリムラ・カピタータ。どれもこれもカワイイ。

絶好のスノボ向き斜面が、高山植物向きだったとは。スタッフの地道な保全に拍手！

私のベストショットは、夫とアザミとミツバチと。トンボや蝶もいっぱいいたよ。

標本も並ぶ富太郎展。ドラマ「らんまん」でお馴染みですが、いやはや凄い方です。

九州の散歩道

「ツール・ド・九州2023」初開催

フリージャーナリスト　湯浅玲子

健康意識の高まりとともに自転車に乗る人が増え、さまざまな自転車競技大会が各地で開催されています。今年10月6～9日に初めて開催される「ツール・ド・九州2023」は、本格的な国際サイクルロードレースです。UCI（国際自転車競技連合）公認のレースで、4日間をかけて福岡・熊本・大分を走り抜けます。

このレースの特徴はチーム戦であること。一斉にスタートして誰が一番速くゴールにたどり着くかを競うシンプルなレースですが、チーム戦なので仲間同士で助け合いながらトップを目指します。ロードレースでは風の抵抗が大きな負担となるため、エース以外の選手たちが隊列を組んでエースの前を走り、空気抵抗を減らす工夫をします。力を温存したエースは、ゴール直前で全力を出してチームの勝利を狙います。

1チームは選手6人ですが、チームから優勝者が出れば、その他の5人がリタイアしてもチームの評価は最高ランクになります。一方で、チーム全員が完走しても、選手の最高成績が下位であればチームの評価は低いものになります。選手の実力だけでなく、チームとしての戦略がものを言うレースなのです。面白いですね。

大会初日は福岡県北九州市の小倉城周辺を巡回する「小倉城クリテリウム」（約45キロ）が行われます。クリテリウムは1周1～3キロ程度のコースを周回して順位を競うレースです。2日目は競輪発祥の地・北九州をスタートし、福岡県大牟田市までのほぼ直線の約152キロです。3日目は九州の大自然の代表ともいえる、熊本県阿蘇地方の雄大な景色の中を走る約106キロ。最後はアップダウンのある周回コースが待ち受けています。4日目は大分県日田市にあるサーキット「オートポリス」を出発点に、標高差700メートルを下って日田市の中心部へ向かう約135キロ。いずれも熱いレース展開が期待できそうです。

自然豊かな九州はもともと各地でサイクリングが盛んです。今回設定されたコースは景観の美しさだけでなく、豪雨などで被災した地域を走ることで、自然災害からの復興を象徴するイベントにもなっています。

原稿を書いている時点では参加チームは発表されていませんが、この大会で順位に応じて付与されるポイントは、世界選手権や五輪の出場枠の獲得につながるため、世界のトップ選手の出場が期待されています。このイベントを通じて、九州の魅力が世界に発信できるといいなと思っています。（写真提供：九州旅ネット）

初日にクリテリウムが行われる小倉城

雄大な阿蘇の自然の中を駆け抜けます

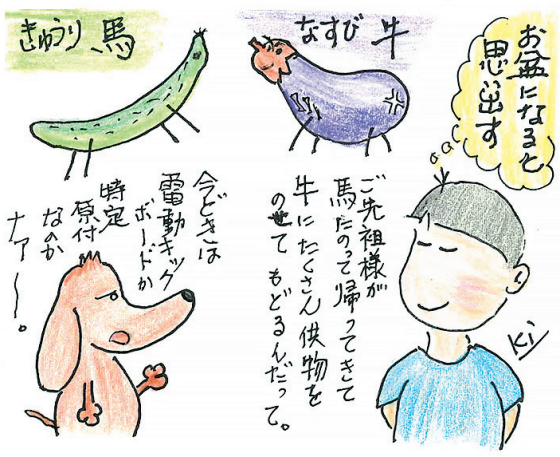
ハッと思いました

「交通ルール」。このルールがあり、このルールを順守する事で安全な交通環境が保たれています。今更ながら当然の事です。このルールの何処かに背いた罰として事故が起きるのですが、一人相撲ならまだしも、理不尽に周りを巻き込む事が多々あります。許せない事です。

数ある交通ルールの中で「速度制限や速度規制」に関してふと思った事があります。それは歩道での速度です。車道の左側を走行する特定小型原付、自転車ですが、特定小型原付は速度制限時速6kmを上限に歩道走行が可能。自転車には速度制限すら聞いたことがありませんし、そもそも自転車は車道を走行するもの。歩道走行には特別な条件があるのです。

また電動車椅子の速度制限も時速6kmと言う事です。以前、歩道を歩いている時にすぐ脇を凄いスピードで電動車椅子が通り過ぎて行きました。思わず「ウォッ」と声が出てしまってビックリ。子供を乗せた電動アシスト自転車に驚いたことは何度もあったのですが、車椅子は初めてでした。

歩行者の歩行速度は時速3～4km程度。高齢者や小さな子供など様々。健康管理のためのウオーキングで5kmほど。何が気になるのかと言えば、「歩道における時速6kmは速すぎる」。

歩道を混在して安全に通行するには、自転車・電動車椅子・特定小型原付の歩道走行の上限を時速4km以下にするべきだと思います。

しかし、仮に速度制限等がなされても、それを理解して守る事が出来なければ、何の意味もない事です。併せて、身分証明の携行義務化も必要かな。すべては「人のなし得る事」なのですからね。